



日本のSF紹介は、かつて英米(特にアメリカ)SF主導だったし、今でも、その大勢に変化はない。しかし、SFの繁栄は、今や世界的なもので、ヨーロッパ圏のSFは、少なくとも日本並みの出版点数がある。ただ、日本での翻訳は、西欧の、仏独伊にしてさえ部分的紹介があるばかり、東欧となると、わずかに深見弾氏や一部同人誌にたよっているだけだ。そんな中で、これは実に貴重な一冊といえる。

上巻には、ポーランド(レムを除く)、ブルガリア、ハンガリーの三カ国の作品が収録されている。大半は、いわゆるアイデア・ストーリーで、それ自体、あまり新奇さはない。けれども、英米流の初期SFと、同列に論じることはできないだろう。やがて将来、独自の方向を見いだしていくはずだ。そういう萌芽は、いくつも見てとれた。分かり切ったことだろうが、SFのスタイルは、国によってすべて異なっている。しかし、読み方は、そう簡単に切り換えがきかないから、多少違和感が残るかもしれない。本集では、ハンガリーの諸作、中でもイヨジエフ「脳移植」の雰囲気、東欧を感じた。(俊)